蜻蛉

ワキ詞

〽是ハ肥後國岩戸とやらんに
居住致す僧にて候抑も此岩戸の
觀世音ハ靈驗殊勝乃御事子
なる間しばらく參籠し江乃
致景を心みるに南西の海雲漫々と
として萬古心乃うちなりがひと
綿々として風かはなき致景あけて

此里をさるは程よ住居なる霊地と
思ひて三年がほどはこゝに住
つかまつりて候爰にいかにも
夜な見なれぬ老女毎日
あり此水を汲て来り候ふも
来り候ハヾいかなる者ぞと
尋ねばやと思ひ候

ヒテ次第
〽のき白河乃水ななめくへつく月哉
秋やぬるらむすむ影うつる瀧の糸
雲をしのぐるとも我が心の
人習ひも又是同じ須臾の観念
いく程とやし我に故人
うとし老悴ととへ事こそあれ
なく露霜なさハまたて霜髪なり

かはなりゆく末乃ありさま
よ能毛とりまことをかなしみてしぬ
ここに老仏も自川からつくせうへ

上音
かの舞曲を舞ふのひやけると
すへ人に値遇をはちふ是引
山さいはわに暑にならく

詞
げにもめぐるも又流水

ロ上詞
なをきてさわてハ　毎日老女来
お坊迄の毎あはれくも痛しう
こうろへ　せめてゆりやう凌
事まてきうずる飛花も
のゝの毎道哀花を我
ミミゝゝこゝ　詞
羽紛ひゆへばなはぞ条々毎

ツヨ詞
遅くぞ侍男ハ四のなるひとう

シテ詞
あ我浅ぬ粟くへ ＼ なまとぬを
なれ遂とくや ワキ ＼ なかりく衰子
シテ ＼ 遂ハ思ひもよらぬ事を仰くや
保撰集の歌ゞ身小まえ力り
ー ー ニ ー ニ ニ ヽ ヽ 詞 上カル ニ ー ヽ ー ー ヽ ー
か詠髪も白川乃ご淪く世きのへ
やにくふり飛と諸しもかくハり
あなわが者筑前乃太宰府よ菴に

桧垣しつらひて住し白拍子
後にはおころへて此しら河衰
ほと里り住し ワキ上カル ＼ なかやふゝは
ヽ ニ ニ ヽ ニ ー ー ー ニ ヽ ニ ー ー ニ ー
去子を妙し ＼ なわが思つく河乃
ー ー ー ー ヽ ー ー ー ニ ニ ニ ー
いほわ衰あろき我藤原の興範
ニ ヽ ニ ヽ シテ上カル ニ ニ ヽ ヽ ー ー
過ろし時 ＼ 水やある水ゝりと
ニ ニ ヽ ニ ニ ニ ヽ ニ ー ー
乞ひし程よが見汲て参らる

上キ

とゝへ三輪とへ徒しなわ

それも三輪なる杉むかし中ぐだく

志ら川乃水の流れおひて

かくめ家海なさ三輪く曇きゆ申

なゐの一ぶ志ろしなも見路りしば

白川乃関とわずら話とひて

よひたまへ暗猶ふまるまもれ

上四

さゝへ遠古の

三輪よりまく

松垣乃女の名を母あらず我よ

云業哉めしりろそやべつい

末世の寄特ぞと思ひなりしも

見行ゑ ふしぎやまやく月も

皆てゞ川嵜深くさちここも底

ぐの巻よいかわ乃婦詞婦婦かよ

只由はかしきさらく　あかり
なる旅乃思ひ居かあらぬ暮さし乃
暮や那　風踊盤よおもかけの流て
烟像なをしばや光り宮乃流て
月捷乃となわば朝小鳥るて
世路よ多さしもいいとよも
女よし白骨隙了郊原小朽ぬ

さき為る有様　無常乃まさと
瀬々も更浅　さつしちわを浪猪
さう以流をのふなしひとや
ばめに以つかふなし鬠るを
も流るを敷とさわばら折り必識を
我せさらし蔓りは見を朝を
さし世　かーきや那あ城ゆは

名は歌人なるがおもしくも見る姿哉

あまりに薪ふ重しげとおもひて

万いつを世（ミテ上カル）さつきんするを

歌はしかしに僧の内法哉文つとよ

（早上カリ）やゞ人は願あまりし薪ひろとよ

中に山人は思ひしるさまり

ながやくすのこをみえたなは

（ミテ上カル）流くをわれ新りきとう旅もこと

又てぬれと語へ旅よろ川の

三輪く見え老人海ありけりしき

（ワキ下）意とほし法は百様尾なども

執心乃水を見遊回の海みえ

（ミテ詞）新ふやゞやくまのひ新く

月かれうまし人真鍋女おかきがれ

世にれくれぞ罪深き故に
ども昔し男を三瀬川よ熱鉄の
木を我小なひ猛火乃ほむらへを
さきてこの水をなくぞ水湯也
漢我身を焼事嫌も恋を惑也
此経は法乃値遇みひられて
ばるへ悪あまとも猛火とふなし

早上カル
さらく宇国果乃名を汲ぞ枕心を
ゆわ捨てどもくうのひ物ふ
へりてくくさくらい浪僧の
ちがひのけ水我まにかき宇罪
もや浅くなるへよし也思ひも
ゆのきさもよ太の枝乃露裏た
たり物の色白川の羽港換よ

うこ正(?)を水を　いきとなし万せし
清凱(?)八潟(?)水よりをちて薮を
月やのおもしき　うれ残星の
らなへり　ハ水溪の水を足
後夜乃鐘の声　南嶺乃葉をさく
うれ涼しき水よりわ出てみよりわも
さらさらと書けるあめ出て

あ井(?)ありし苔(?)蔭うかゞ方ら
むくひならばゞ乃くもし足
さるほどもなくて　いやまさりける
思ひ乃色らしき(?)なみ(?)蔭なみさに
ゞ見こめひ　清凱八乃うきを縄
くわ乃人　いうつし人も
谷花乃春のおし　たる薬らぬ縁乃

はふるきも一日為遊めぐみや
陸奥の錦の綾錦女の日ま袖も
いとせめてぞもぢはなゝし哉
秋影乃翡翠のはそ毛志たに袖
ざはり装まゆも霜かわ家がらよ
うはの西影老裏のきえはすて
乃とわふ乃えし黒髪ハ白み乃

もかはちわあくたがりるまん八はる
男乃百様う也しききまゆ有り
よそ我思ひ以はもはなはかり屋
ぞ白河のなみかをし　藤原滿
與範乃ほをし曲乃白拍子と
一かしまかしのいずれし裳
袖子袖ぢからうゝともあそしはも

だしの我袖をうへしえぬ心そう
ちりさぬ陸奥乃ぎふの面帯せふ
おりしばしより白拍子面影乃
あはあふぐしくらしもにな
者手な祈し舞なまハまのりくそも
かえのすふさし 杉さぬのわ
志きわにの忍ま人へたあざまし

なかしなさ乃袖露うらりしひ
うひいさす ひのまさ濃女裏
男乃果哉 水せ乃畑清るへの
縄のくわらへし 甘しふ
かの通旅白川乃かぐじし川おら渡
志つら川裏 水おありまき哉志ほ
故よ 是まの人歌まま出にほなや

、ーーーーーーーー

ばらふあし大原蒼音をいそう

一八九ー下、、ーーーー一九〇ーーー下ー

たゆまり義学孫ゑ悲てしひ家

、ーー、、、ーー、ー

方八うしる飛哉字の人てうひ

、ー、ー

あるまへく